

軍事・歴史・政治・経済研究紙

MONTHLY DAITOH-NEWS

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

中東問題と日本の未来

タリバン政権の孤立化

アメリカはこれまでに情報機関を通じて、地下指令を以て様々な政治工作を行ってきた。その一つが、アラブ首長国連邦(UAE)に働きかけ、アフガニスタンの実行政権であったタリバンと国交を断交する政治的画策であった。これは二〇〇一年九月二十二日、国営の首長国通信(WAM)が、外務省筋の話として報じたものである。

二〇〇一年九月十一日に起こったアメリカ同時多発テロ(世界貿易センタービルやペンタゴン旅客機突入自爆テロ事件)の首謀者とされるウサマ・ビンラディン氏のアメリカへの身柄引き渡しを拒否したことを受け、断交を決めたとされる。

UAEが断交を決めたことで、タリバン政権と外交関係を結ぶのはパキスタンとサウジアラビアの二カ国のみとなった。

さてこうした国際政治の構図の中で何が起ころうとしているのか。

中近東における国際問題であるが、ウサマ・ビンラディン氏は、「十二人委員会」(M.J.12)に支配されているアメリカ国家のスケープ・ゴート(scapegoat/聖書に見える「贖罪の山羊」の意)で、民衆の不平や憎悪を他にそらすための身代りを指す。社会統合や責任転嫁の政治技術で、多くは社会的弱者や政治的小集団が排除や抑圧の対象に選ばれられるべく、周到に用意された「駒」にすぎないというユダヤ教的カバラ思想である。つまりここに「ゴイム」(豚/人間の皮を被った異教徒は、我々神から選抜された民族の「餌」という思想。この餌とは異教徒の財産であり、領土であり、生命である)の考え方が浮上し、異教徒を「贖罪の山羊」と看做す思考がイスラム世界の中で吹き荒れている。

こうした思考に基づいて、アメリカはCIAの画策とともに一九八六年から、ビンラディンをアフガニスタンでの対ソ抵抗運動の英雄に祭り上げ、ラディンの武装イスラム過激派「アルカイダ」を育成する一方、一九九一年に始まったイラクとの「湾岸戦争」の終結後もイスラム教の聖地メッカのあるサウジに異教徒の米軍を駐屯させたりして、イスラム原理主義を熱り立たせ、燃え上がらせる巧妙な罠を作り上げた。ビンラディンは、米軍のサウジ駐屯に反発して、以後、反米活動を開始した。これがこれまでの経緯である。

報復戦争と国際テロリズム

今や、テロは国際犯罪規模に拡大しつつある。また、こうしたものに對し、一国家が武力による攻撃ならびに、国家の実質的関与も認められないというのが、今日の国際間の実情である。

今日、アフガン問題は情報戦の影にすっきり隠れ、その動きは極めて水面下の動きであるため、一般には分かりにくい。これまでの経緯から考えると、地下組織の温存されたテロは、少なくとも、アフガニスタンのタリバン政権が、テロの主体という証拠は何処にもなかった。また首謀者を、アメリカは捕まえることが出来ず、その政治的言い訳の矛盾が、再びイランに向けられている。

アフガニスタンが、ビンラディンの即時引渡に応じないことを理由として、アメリカがアフガニスタンに武力行使をすることは、国連憲章上の自衛権行使として認められないにも関わらず、これをゴリ押ししてアフガンへの武力行使が開始された。そしてイラク問題と双肩を兼ねるといって、軍事介入のいちゃもんが、中近東に波及し、その波が静かに押し寄せるといって複雑な政治緊張を作り上げた。こうした中で、波が国連安理の問題だ。

また、自衛の為に取られる措置は、「安全保障理事会が国際的平和及び安全の維持について、必要な措置を取るまでの間」、他の措置をとる事が出来ない、緊急やむを得ない場合に限り、攻撃を除く。必要かつ相当な限度に限られるとした、世界支配層の意向が反映されている。

アメリカは外交努力など、他に取らざる手段があるにも関わらず、アフガニスタン・タリバンとの交渉を一方的に打ち切り、テロ行為とは関係ない、一般のアフガニスタン国民も巻き込んだ大規模な「報復戦争」を行おうとしており、必要性・相当性は一切認められていないのが実情だ。

イラク問題の国連査察で、アフガン問題はすっきり影に隠れてしまった観が強いが、アメリカが公言する通り、アフガニスタンへの武力攻撃の本質は、「自衛」ではなく、「報復」「復讐」であって、自衛権行使に該当しないのがその実態構造である。

そもそも、歴史をみれば、あらゆる戦争が「自衛」の旗印の下に行われたと言っても過言ではない。

例えば日本が、中国を侵略した時、アメリカやイギリス等に宣戦布告した時、国家の戦争指導層は「自衛」を標榜した。おまけに「八紘一宇」や「大和魂」や「五族共栄」が惹き合いに出され、こうした意識を国民に植え付けて、元々勝ち目の無い戦争に引き摺り込んで行ったのは明白な事実だ。これはかつて旧陸海軍が貧弱ではなく、これを指導した戦争指導層に大きな問題があったのである。

無能な指導体制が有事を指揮する場合、必ずこうした事態に陥り、そのとぼつちりをまともに喰らうのは、底辺の庶民層である。こうしたこれまでの近代史を考えてみると、今、国連憲章で例外として認められている「自衛権行使」が、厳格な限定に服さなければならぬのは当然であり、テロリストはいつ何処で、何をやるかわからない」として「自衛」の名のもとに、地球規模での戦争行為を行うことは、歴史の教訓をも全く無視するものであって、到底許されないものではないか、とい

戦争と平和の原理 (その五十一) 米国のイオンド大学教授 曾川和翁

交通網と通信網の発達により、世界はより小さくなり、その日のうち出来事は、即座に知る事が出来るようになった。そして世界の各国は運動して動いていると言った状態になった。

しかし一方でこうした現実、非常に不安定になったと言え、要約すれば、現代という時代は不安定の上に政治や経済や軍事行動が行われ、特にわが国は大量輸入国である。経済面と安全保障面で大きな問題を抱えている。しかしこうした現実を真剣に考える人は少ない。

それは日本国憲法の第九条に回歸されるからである。多くの日本国民は、憲法によって戦争が放棄されているのであるから、日本は世界各国で起る内戦や戦争と全く関係ないと言った考えを持っている人が多くに思える。しかしこれは戦争を知らない世代の一方的な解釈に過ぎない。今日の世界を見渡してみれば、日本国憲法は確かに戦争を放棄する条項はあるにはあるが、世界各地で起る戦争が、決して日本を戦争から解放し、放棄させているという事ではない。

日本を戦争から放棄させない理由として、わが国は衣・食・住を海外からの輸入に頼っている。特に輸送路として重要なキーポイントとなっているのが、大量輸送する事の出来るシーレーンだ。この回路が一度遮断されれば、日本中は忽ちパンニックの襲われてしまう。交通機関は停まり、重大な食糧危機が起るであろう。自給能力の乏しい日本は、世界は平和であり続ける事を切に願わなければならない。一日も存続する事は出来ないのである。世界の何処の国で戦争があっても、その影響は直截的かつ間接的に直ぐに反応が現れるからである。したがって世界平和は日本にとって重要課題であり、自給能力が乏しいからこそ、世界は平



う疑いが起ってくる。さて、こうした構図の中で、国際社会を紛争と平和で揺すぶっている背後には、影の仕掛人達がいるのである。そしてそれは自衛隊は、日本国軍の形態を有した有事の自衛隊ではなく、国連指導層の連合国軍というイメージが強く

今回の報復戦争の支援は、自衛隊の派兵される地域はアフガニスタン周辺といわれているが、法案においては、活動地域は「我が国領域」「公海及びその上空」「外国の領域」(当該外国の同意が要件)とされている。(独眼竜)

た戦争を対岸の火事と見るのが日本人の現在の意識であるようだ。世界の法治国家の中で、日本ほど「平和」と言う言葉を安易に使って、これを乱発している国は珍しい。それにも関わらず、本当の平和の意味を知る日本人は少ない。その為か、「平和とは何か」と言う直接的な質問をすると、これを明確に答える事が出来ない人が多く、戦前戦中世代の高齢者にこの事を質問しても、返答に窮する人が多かったのである。

平和には各々の意味を持ち、また解釈も様々である。さて、平和は国内の平和はもとより、国際的な平和も重要な人類の課題である。

そして国際間の問題に對し、言及するとき、多くの日本人は、平和とは、戦争や武力闘争のない状態を平和と決めつけているようである。すなわち、これが通常の状態であり、このような状態の下で、個人生活を満喫するというのが日本人の平和観であるらしい。こうした日本人の意識は、戦争放棄を規定している日本国憲法から米のものである。

しかし、われわれ日本人が真剣に考えねばならない事は、今日の平和の状態と言っているのは、全く戦争のない状態ではなく、厳密に言えば、平和でもなく、また戦争でもない状態という事である。つまり、非常に不安定な状態におかれています。そうした中で、日本人の衣・食・住が営まれているという事である。そいよいよおいて多くの日本人は、こうした現実を見逃しているのである。

平和とは、言い換えれば、戦争と表裏一体の関係にあり、戦争の定義にしても、あるいは戦闘の解釈にしても、世界的な意味合いからすれば、各々に異なっているという事である。かつてレーニンはプロシアの戦略家クラウゼヴィッツの言葉を引用して、「戦争は他の手段をもつてする政治の継続である」という事を言わしめ、政治が全体であり、戦争と平和は同一のものであると定義している。

歴史を工学的に科学する

〒802-0985
北九州市小倉南区志井6丁目11-13
(尚道館ビル2F)

九州科学技術研究所
093(962)7802 FAX093(961)8224
Eメール: science@daitouryu.com

九州科学技術研究所
Kyushu technology Institute

九州科学技術研究所 URL
<http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/>

大東流霊的食養道HP
www.daitouryu.com/syokuyou/

癒しの杜の会HP
www.daitouryu.com/iyashi/